



世帯数 6,059戸
人口 14,029人
(令和2. 11. 1現在)

ふれあい会食会

寿地区社会福祉協議会

今年も65歳以上の独居高齢者、80歳以上の老々で暮らしの方々49名をお招きし、民生・児童委員、健康づくり推進員などスタッフがおもてなしをいたしました。



今年も65歳以上の独居高齢者、80歳以上の老々で暮らしの方々49名をお招きし、民生・児童委員、健康づくり推進員などスタッフがおもてなしをいたしました。今年も新型コロナウイルス禍の中、感染防止から三密を避け、広い体育館を使用し、検温・消毒・マスク着用をお願いし、そして会食の弁当はお土産にお持ち帰りいただきました。

まず寿社協百瀬記行会長、寿町会連合百瀬泰雄会長の挨拶では、今年の行事は中止や縮小を余儀なくされる中で、開



催ができて嬉しいこと、そして楽しんで話されました。齋藤保健師からは、低栄養を防止するため、一日二食は三皿をよく噛んで食べましようとの指導がありました。

古條生活支援員からは、困った事や不安な事があれば、ご連絡下さいとお願いしました。

今回の楽しみは寿の歌姫

「峰ちはる歌謡ショー」で元気になっていただきました。

いつもは客席を回って握手したりするので、今回は出来なく残念です。歌は天

童よしみの

「女の花道」

峰ちはるデ

ビュー曲「思

い出に酔いながら」で始まり、

参加者からのリクエストを含

め、14曲を熱唱しました。

90歳の女性参加者は、毎年

送迎付きで参加させていた



だき、とても感謝しています、そして来年も来たいとも話されています。

【館報編集委員 遠藤 勝弘】

192サロン 離乳食を学ぼう！

10月20日(火)午前10時から、寿地区福祉ひろばにて子育て支援192サロン「離乳食を学ぼう！」が開催されました。

今回は、乳児から幼児までの離乳食と食事について、南部保健センターからお越し

いただいた2名の職員から話を伺いました。



講座では、食品サンプルを使った具体的な食事のアドバイスや説明が行われ、集まった12組の参加者は熱心に耳を傾けていま

した。講座の後半では、参加者から「子どもが嫌がって食べないときはどうすればいいか」等日常の食事での悩みに

ついて多くの質問が寄せられました。



ニユースポーツ体験会

10月25日(日)、ニユースポーツ体験会が、寿体育館にて開催されました。

ニユースポーツを楽しむ会の皆さんの指導のもと、5種目の対抗戦が、5人1組4チーム編成で行なわれました。

その中で

もおにぎり に似た形で、不規則に弾むボールを打ち合う「ワンバウンドふらばるバレー」では、

白熱する場面もありました。コロナ禍の中、参加者は少人数でしたが、和気あいあいとプレーする姿が印象的でした。



このスポーツは、今まで知らなかった様々な種目や新しい趣味にきつと出迎え、誰にでも楽しめます。

ニユースポーツを楽しむ会では、毎月第1、第3月曜日(午前9時〜正午)に活動しているそうです。興味のある方は、寿体育館に行って体験してみ

てはいかがですか。

【館報編集委員 須山 浩二】

灯油浄化工事について

現在寿公民館敷地内では、地中へ流出した灯油の浄化工事を12月まで実施しております。



上下水道の配管工事を伴うため、11月9日(月)から公民館のトイレ・調理実習室・給湯(水道)及び体育館のトイレ・手洗いを閉鎖し、体育館南側駐車場の仮設トイレと水道をご利用いただきます。公民館及び体育館へお車でお越しの方は、乗り合わせにご協力いただきますようお願いします。皆様には大変ご不便をおかけしますが、ご理解とご協力をお願い申し上げます。



【寿公民館】

わがまち飛行機

今回は、寿田川町会の金井弘幸さんからお話をお伺いしました。



金井 弘幸さん

子供たちの夏祭りの際に、紙飛行機作りを教えていたのですが、金井さんの作る紙飛行機は、胴体は薄い木、羽の部分は賞状などにも使われるケント紙を二枚重ねて作り、長さ15cmの木の棒につけた輪ゴムを機首の下の部分に引っ掛けて飛ばす本格的なものです。

紙飛行機作りは、豊科の紙飛行機作成グループの方と出会ったことがきっかけとなり、10年以上も続けているそうです。

お宅には、飯沼飛行士のモデルのものが、競技用のもの



など、多くの紙飛行機があり、競技用のものを用いての大会は、都道府県大会から全国大会まで開催され、滞空時間を競い、上位の方は2分間も飛ばすそうです。滞空時間をのばすには、主翼と尾翼のバランスをみながらの細かい調整や、飛ばす際には、風を背に受け上昇気流をよんで飛ばすのがポイントとのことでした。生き生きと楽しくお話をしていたので、私も紙飛行機を作ってみました。

【館報編集委員 桜井 誠二】

エピソードで綴る寿の歴史

雨乞いは鉢伏山山頂で

江戸時代の寿地区は「3日雨が降れば水害、照れば水不足」といわれ、牛伏川の洪水と、水不足による旱害に常に悩まされた地域でした。牛伏寺川の満水はその水源域に各村の農民が主として水田に入れる刈敷や若葉、落葉を長年にわたって収奪した結果、山は保水力を失い、山を形成するもろい岩盤も手伝って3日強雨が降り続けると牛伏川が氾濫し5〜6年に一度は白姫村を始め旗本領の村々に甚大な被害をもたらしました。農民は毎年牛伏川の堤防を高くすることで洪水を防ごうとしてきました。また、寿地区は昔前まで沢山の溜め池があったことが示すように旱害常習地帯でした。江戸時代この日照りに対応するには「雨乞い」しか方法はありませんでした。

百瀬陣屋文書の中で「雨乞い」について詳細な記録が載っているのが「文久二年御用日記控」です。文久二年(1862)は5月に入ると晴天が続く村々の溜め池の水が底をつき、田植えが出来ない状況となりました。百瀬陣屋は5月26日竹瀝村稲荷社で雨乞い祈禱を行っています。5月28日午後少し雨が降りました。早天が続く6月2・3日と強雨が降り

遅れていた田植えが一部可能になりました。6月12日、見分の結果、植え付けが出来なくなり、畑成り分が10石3斗5升余出てしまいました。6月18日になると、白川村では北沖の溜め池の水が無くなりました。陣屋は6月19日に21日上瀬黒中山龍王社での雨乞いを命じます。朝五ツ半(10時)5カ村の寺社(瓊林院・王徳寺・生蓮寺、正念寺と神主2人)、村々役人、惣百姓が登山して祈禱が行われました。更に6月21日、白川村は諏訪明神雨池の水を借り受けに向い、両瀬黒村と竹瀝村は戸隠神社の水を借り受けるために人足を出発させました。22日夜雨が降りましたが続かず、植田への水の供給が滞り7月7日には知行所の水田のほとんどが干上がりという状況となり、遂に百瀬陣屋は最後の頼みの綱、鉢伏山頂での雨乞いを7月11日に行くと村々に通達しています。5カ村の寺社、各村役人、惣百姓の参加を求め陣屋からも代官父子、下役2人も登頂しています。百瀬村は酒3斗4升、外に寿留女、しらす、白簪、茶・溜まり、大根干・煮大豆を用意し、白川は山駕籠人足2人、草履取1人。荷馬1疋、

上瀬黒は弁当持ち2人、乗りかけ馬1疋、乗り馬2疋、竹瀝村は合羽簀持ち4人、鎗持ち2人、百瀬は山駕籠人足2人、荷馬2疋を分担しています。この日の朝六ツ時(6時)白川一位屋敷に集合し、鉢伏山頂迄登ったのは123人、足弱、老年などで牛伏寺迄登ったのは38人で計161人でした。山頂で祈禱が行われ御神酒と弁当を頂き、八ツ時(午後2時)には一同、牛伏寺へ下り帰宅しています。代官の服装は小袴、野羽織、外の下役は野行支度とあります。大がかりな雨乞いの成果は翌日より現れ、7月12・13・14・15日と雨が続き一息つきました。しかし、湯水のダメージは大きく閏8月12日陣屋は村役人と検見を行い白川村・下瀬黒村・竹瀝村は年貢の3分引き、上瀬黒村は2分5厘引き、百瀬村は8分引きを申し渡しています。



かつて鉢伏山頂に祀られていた雨乞い碑(大宮八幡社蔵)

【寿史談会顧問 青木 教司】
史料「文久二年御用日記控」
(松本城管理事務所蔵)